530　骨シンチグラフィによる上咽頭癌骨転移の診断

嶋田文之*，油井信春**，戸川貴史**，木下富士美*，小圷正木**（千葉県がんセンター頭頸科*，核医学診療科**）

上咽頭癌の予後は不良であるが，その原因の一つは遠隔転移が多いためである。本疾患の骨転移の診断における骨シンチグラフィの有用性について検討した。対象は37例で，Technetium-99mを3mCi静注し，3分後から頭部の正面・左右側面像をとり，次いで前後面の全身像を撮像し検討した。結果は37例中12例に骨転移をみとめた。50歳以下の症例に頻度が高かった。原発巣が小さくても骨転移をみとめた例が4例あった。両側頸部リンパ節転移がある例に頻度が高く，特に下頸部にまでおよぶ例に多かった。初診時に発見される例もあるが，多くは1年以内に出現した。部位は脊椎や肋骨に多く，四肢骨には少なかった。以上より骨シンチグラフィは上咽頭癌の診療上重要で，経過観察にも欠かせないといえる。

531　骨シンチによる乳癌治療効果判定におけるflare responseについて

松本誠一，川口智義，網野勝久，真鍋　淳，堀越　昇[1]，霞富士雄[2]，沢野誠志[3]，山田恵子[3]，野村悦司[4]（癌研病院整形外科，化療科[1]，外科[2]，放射線科[3]，アイソトープ部[4]）

治療に反応した転移巣において治療開始早期一過性に^{99m}Tc-MDPの集積が増加するいわゆるflare responseは，骨シンチにて骨転移の治療効果判定をする際，判定を誤まらせることがあるため重要である。そこでflare responseを呈した自験例について検討を加えた。症例は，1978年から1988年3月の間に当院にて骨シンチを施行した4169例の乳癌のなかで，骨転移を生じ骨シンチにて治療効果判定を施行したのは325例であり，このなかの7例にflare responseを認めた。これら7例では，flare responseは治療開始1－4月後に認められたが，その後，異常集積は低下し治療有効と判定しえた。

532　乳癌の骨転移に関する核医学的検討

吉居俊朗，森田誠一郎，高橋一之，平山貴紳，上妻隆昌，大竹　久（久留米大学　放射線科）

乳癌は骨転移の多い腫瘍として知られており，また，骨転移の検索における骨シンチグラフィの有用性はすでに報告されている。

今回，われわれは当科において施行された乳癌の骨シンチグラフィについてretrospective に分析し，若干の検討を加えた。

対象は1979年1月から1987年12月までに当科に入院治療した術後乳癌 155例である。年齢は32歳～80歳（平均53歳）で，臨床病期は，stage Ⅰ：9例，stage Ⅱ：55例，stage Ⅲ：63例，stage Ⅳ：9例，不明：19例であった。骨シンチの所見について，組織型，病期別に，また，発生部位および個数などについて検討したので，それらについて報告する。

533　肝細胞癌における骨シンチグラフィの臨床的意義

大草昭彦，熊野町子，大西卓也，馬淵順久，中川賢一，藤井広一，浜田辰巳，石田　修　（近畿大学放射線科）梶田明義（大阪成人病センター放射線科）

昭和62年4月より63年3月までの間に，当科で肝細胞癌と診断された37症例を対象に，骨シンチグラフィを行い，その意義を検討した。その結果，37例中14例（38%）に骨転移が疑われた。そのうち多発性8例，単発性6例であり，Sensitivity 100%，Specificity 87% であった。骨転移部位は肋骨，胸椎・腰椎に多く，四肢骨は少なかった。肝細胞癌の型分類，年令，性別，ＡＦＰ等の各ファクターと骨転移との関連は認められなかった。肝細胞癌における骨転移の早期発見のスクリーニング検査として骨シンチグラフィは有用であると考える。

534　肝細胞癌における骨転移についての検討

伊藤秀臣、日野恵、山口晴司、才木康彦、羽渕洋子、大谷雅美、木村裕子、宇井一世、池窪勝治、工藤正俊*、藤堂彰男*（神戸市立中央市民病院核医学科、*同内科）

肝細胞癌はきわめて急速な経過をとり、予後不良のためその骨転移についての報告は少ない。我々は retrospectiveに肝細胞癌における骨転移について検討したので報告する。骨シンチグラフィは Tc-99m MDP 20 mCiを投与し、3時間後に撮像した。対象は確定診断のついた肝細胞癌患者43例であり、男性34例、女性9例、年齢は34～76歳、平均61.8歳であった。骨転移の有無はX線写真、骨シンチグラフィでの経過、臨床所見等で決定した。43例中13例に明らかな骨転移が認められ、2例は不明、他の28例は骨転移は認められなかった。転移部位としては、胸腰椎、肋骨、骨盤、頭蓋骨に多くみられ、X線写真では、溶骨像を呈するものが大部分であった。

535　I-123-IMPおよびTc-99m-HMPAOによる肝細胞癌の骨転移巣の描出

森田浩一，小野志磨人，福永仁夫，大塚信昭，永井清久古川高子，友光達志，柳元真一，森田陸司（川崎医科大学核医学科）

肝細胞癌2症例に，I-123-IMPおよび Tc-99m-HMPAO シンチグラフィを施行したところ，骨転移巣にこれら2つの放射性医薬品の集積増加を認めた．転移巣へのI-123-IMPおよびTc-99m-HMPAOの集積機序は明らかではないが，これらの放射性医薬品によるシンチグラフィは肝細胞癌の転移巣の描出やその診断に有用と考えられた．

Presented by Medical*Online